

シェイクスピア全作品の中でも『マクベス』は、原作上演あるいは翻案を通して400年以上の長きにわたり高い人気を誇ってきた。ダヴェナントの改作、ギャリック、ケンブル、キーンの主演上演、ヴェルディのオペラ翻案など枚挙に暇がない。日本においても『マクベス』の映画翻案である黒澤明の『蜘蛛巣城』や、蜷川幸雄の『NINAGAWA・マクベス』はこれまでのところ国内外でもっとも知られているシェイクスピア翻案・翻訳上演となっている。本セミナーでは、原作に潜むどのような性質が受容者を引き付けてきたのか、あるいは、受容後にどのような新たな芸術表現へと繋がってきたのか、4つの視点から検討した。ゲスト・コメンテーターのカリフォルニア大学ポール・プレスコット（Paul Prescott）教授を中心に行ったディスカッションを含め、それぞれの発表要旨は以下の通りである。尚、当日の発表・ディスカッションは英語で行った。（コーディネーター：京都大学 栗山智成）

1. Lady Macbeth as “a poor player”

藤井万里子（聖心女子大学大学院 博士後期課程）

本発表では、劇中でマクベス夫人が纏う dramatic energy の解明を試みた。Alison Findlay が指摘する通り、夫人は劇中で hostess、Queen、wife など様々な役割を果たすが、今回は patient としての夫人に着目した。従来マクベスを、彼が言及する “a poor player” (5.5.23) として捉える見解が一般的であったが、マクベス夫人もまた “a poor player” であると考えられる。

5幕1場で夢遊病を患うマクベス夫人は、無意識のうちに、医者や侍女の前で patient の役を演じているように見える。Patient である夫人は過去の心情や行動を再演している。2幕2場で夫人は、bloody sin に苛まれる夫を叱咤し、罪を隠すため “nightgown” (2.2.72) を羽織るよう指示していた。夢遊病の夫人は、当時の夫の台詞を繰り返し、手から血の臭いが消えないことを嘆く。頻繁に見られるという、夫人が手を洗う仕草は、彼女が実際には bloody sin に怯えていた可能性を示唆する。また、夢遊病の夫人は “nightgown” (5.1.62) を羽織って登場するのみならず、不在の夫に対し “nightgown” を羽織る指示を出す。これらの所作は、夫人が自身の過去だけでなく夫の過去をも再演している証となる。

マクベスは夫人の dramatic energy の余韻が残る舞台で “a poor player” という人生観を提示する。5幕5場でマクベスは妻の死の知らせを受けた直後に、命を “brief candle”、人生を “a poor player” に喩える。5幕1場で夫人が持っていた “taper” の灯は消えたものの、彼女の dramatic energy はマクベスに引き継がれている。夫人は様々な役を演じ、観客に哀れみを誘う (poor)、存在感が強い役者なのである。すなわち、マクベス夫人もまた “a poor player” であり、それは単なる虚しさに留まらない。

Prescott 先生から「マクベス夫人の命の灯が消えゆく一方で、dramatic energy は強まる」という点についてお尋ねいただいた。「死の描写はシェイクスピアの作品で頻繁に見られるが、それは必ずしも観客に虚無感のみをもたらすわけではないと考える。夫人は死を目前にして、他者に隠してきた精神の脆さをさらけ出す。しかしながら、あるいはだからこそ、この場面は『マクベス』の中で最も印象的な場面の一つであり、マクベス夫人の dramatic energy が充溢する場面であると言える」と回答した。

2. “Why are you silent?”: Lady Macbeth and Her Speech/lessness in the film *Macbeth* (2015)

田邊裕子（東京大学大学院 博士後期課程）

本発表は、“Why are you silent?”: Lady Macbeth and Her Speech/lessness in the film *Macbeth* (2015)と題し、ジャスティン・カーゼル監督による映画『マクベス』における、マクベス夫人の描かれ方を考察した。

マクベス夫人といえば、ダンカン王殺害への強い意志と行動力、そして終盤の夢遊病の姿が強烈な印象を与え、そのキャラクターやイメージは広く知られている。しかし、ウィリアム・シェイクスピアによる原作の戯曲において、夫人はダンカン殺害後の登場が少なく、自分の考えを話したり、感情を吐露したりする場面がほとんどないため、前者から後者への変化は描かれていない。カーゼル監督による映画では、夫人の登場回数が増やされ、また新たな場面が加えられており、ダンカン殺害のあとの夫人の変化が丁寧に描かれている。

本発表では、夫人が黙ったまま表情や体で感情表現をする、そのクローズアップに注目し、暴君化するマクベスに対する戸惑いが沈黙によって表現されていることの意味を論じた。原作の夢遊病の場面は、映画において廃墟となった小さなチャペルでの独白として書き換えられ、夫人の台詞が終わったのちカメラは夫人の顔のクローズアップからカメラアングルを切り替え、幼児の姿を映し出す。夫に対して沈黙していた夫人は、子どもを前に再び語るようになるのである。マクベス夫人が、妻と母という家庭内での役割のなかで発話する（あるいは発話しない）ことについて、本映画は夫人の内面の変化を丁寧に追うことで原作よりも理解しやすく親しみやすい人物として夫人を描いている。その一方で、ジェンダーロールを背負うことを前提としている側面もあり、今後さらに分析をしていきたい。

当日のディスカッションでは、「沈黙」について、発表で前提としていた「台詞がないこと」というレイヤーに加え、音響演出や環境音への注目の必要性をご指摘いただいた。また、原作の夢遊病の場面で夫人が手を擦り続けるところは、台詞の内容によって罪を告白するだけでなく、その身体的な表現も印象的であるが、映画ではそのジェスチャーを採用せず、床に座った夫人はほとんど体を動かしていない。「台詞がないこと」には周囲の音響や身体的・空間的表現など複数の要素が織り込まれており、引き続き考察を深めていきたい。

3. Junji Kinoshita's Translation of *Macbeth*: Recreating Shakespearean Rhyme in Japanese

中谷森（京都大学こころの未来研究センター 特定研究員）

今回の「『マクベス』を読む」セミナーにおいて、私は、木下順二による『マクベス』の翻訳という観点から、戦後日本における『マクベス』人気の理由について一考を加えた。本発表のなかで特に着目したのは、木下が1970年の初訳から1988年の改訳にかけて、『マクベス』1幕1場の魔女のせりふに見られる脚韻を、日本語において再創造する手法を模索していたという事実である。発表では、原文の脚韻を単純に模倣したとみえる1970年の訳文から、九鬼周造の押韻論の影響を受けて書かれた1973年のエッセイの中での試訳を経て、1988年の再版において、脚韻ではなく語尾の反復と中間韻を組み合わせる手法に辿り着くまでの、木下による技法の変遷を分析した。そのうえで、発表では、1950年代日本における詩劇への関心の高まりと木下の接点を指摘し、音と意味との複雑な絡み合いを体現する言語性という点において、木下にとってシェイクスピアの『マクベス』が特に重要な意味を持っていたのではないかと結論づけた。

発表後の質疑応答ではプレスコット先生より『マクベス』において脚韻の占める割合が決して多くはないという事実を鑑みると、なぜ木下が、これほどまでに脚韻の再創造にこだわり続けたのかという点が疑問として残るとの指摘があった。セミナーでは、改行の手法など脚韻の他にも木下が試行錯誤を重ねた箇所があることに触れるとともに、木下の言語観における音の重要性を再度指摘することで、この質問に回答した。また、セミナーを終えて振り返れば、原文のなかの特定の表現にこだわり続ける木下の姿勢は、シェイクスピアの言葉の中から普遍的なエッセンスを抽出するよりも、個々の言語表現の固有性を大切にする木下独自の眼差しを映し出しているのではないかと、とも考えるに至った。

4. The Shakespeare Ensemble's *Macbeth* in their 2019 Japan Tour

倉田紘頭（マセキ芸能社 役者・芸人）

2019年に私は役者として、Ben Crystal率いる多国籍劇団 Shakespeare Ensemble の Japan Tour (*Romeo and Juliet*, *Macbeth*, *Hamlet* 公演) に参加した。セミナーではこの公演ツアーが取り組んださまざまな挑戦について紹介した。演出家不在の役者による自律的な演出方法を導入することでリハーサル時間を大幅に短縮し、シェイクスピアの時代の英語発音である Original Pronunciation を用いることで観客全体を言葉の情感に集中させ、日本語のコメディパートを挿入することで演者と観客の情感の共有を促したこと。数ある達成の中でも個人的に印象的だったこの三つに力点を置いて発表した。ディスカッションにおいて Prescott 先生から、*Macbeth* の Porter Scene に追加された日本語のコメディパートがそれより後のシーンの印象を変えてしまうように、其々のシーンやその他の諸要素が互いに干渉し合い、作品のエネルギーを高めたのではないかとのご指摘をいただいた。セミナー内では言及できなかったが、Shakespeare

Ensemble ではエネルギーを高めるためのトレーニングをいくつか実践していた。木の棒の両端を二人の役者で支え合い均衡状態を保ちながら互いの運動を刺激しあう Sticks と呼ばれるトレーニングを行ったり、舞台上で体をほぐす際は舞台のエネルギーを自分の身体に取り込むような動きの型をしたり、全員でリズムを打ち鳴らしながら Original Pronunciation での台詞を節に合わせて歌ったりした。トレーニングの具体的な効果は説明されることなく、私は見様見真似で合わせていたが、そのどれも作品のエネルギーを高めるという点では一貫していた。私がツアーに参加するなかで感じた魅力は、非言語的なやり取りを通じて行う作劇が、エネルギーを引き寄せ、エネルギーに引っ張られることで、作品の完成を目指した点にあるのではないかと今は考えている。

(* ご登壇者のご意向により写真掲載はしていません。)